

# 福井県英語学習 CAN-DO リストの活用

## 一目標と指導と評価の一体化を目指して一

### 調査研究部 英語ユニット

吉村美幸 富田秀明 川崎美和

文部科学省が、学習到達目標を CAN-DO リストの形で具体的に設定するように提言し、各学校において CAN-DO リスト作成の取組みが行われた。しかし、CAN-DO リスト導入の目的は、ただ作成することだけでなく、日々の授業で活用し、到達目標と指導と評価の一体化を達成することにある。

平成 26 年度は、英語を使える日本人育成のために、また、小・中・高を見通した指導の実現のために、英語ユニットでは各学校が CAN-DO リスト作成の際の参照枠として利用できる「福井県英語学習 CAN-DO リスト」（以下、「県 CAN-DO リスト」）を作成した。

今年度は、各学校において「県 CAN-DO リスト」を参照して、学習到達目標を CAN-DO リストの形で具体的に設定する方法と、その到達目標を指導と評価に活かすための方法を提案する。

〈キーワード〉 目標と指導と評価の一体化、福井県英語学習 CAN-DO リスト、到達目標

## I はじめに

昨年度作成した「県 CAN-DO リスト」は、卒業時や学年修了時の到達目標の基準となるレベルを参照できるものであり、小・中・高を見通して、到達目標における縦のつながりだけでなく横のつながりも統一性が図れるようにしたものである。この「県 CAN-DO リスト」を活用して、それぞれの学校が卒業時や学年修了時の到達目標を児童・生徒の実態や指導内容に合わせて具体的に設定する方法を提案する。また、設定した目標に向けて指導を行い、指導内容と結びついた評価の在り方や自己評価表の活用法も提案する。本研究では、この 2 つの段階を踏まえた活用法について以下に述べることとする。

## II 「学習到達目標 CAN-DO リスト」作成方法の開発について

### 1 各学校「学習到達目標 CAN-DO リスト」作成方法開発の背景

各中・高等学校が各学年の学習到達目標を CAN-DO リストの形で設定し、活用するにあたっての参考となるように、平成 25 年 3 月に文部科学省初等中等教育局より『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』が作成された。手引きには CAN-DO リストの趣旨・目的や、到達目標設定手順、学年ごとの学習到達目標例、指導計画への反映例等が記されている。それでもなお、各学校が設定する CAN-DO リストは、学校独自に試行錯誤で作成しているため、文法習得を主眼としたものや、語数でレベルを表しているものなど、形が様々であり、統一性がないものになっていると言える。その原因は、手引きが、あくまでも各学校が生徒の学習の状況や学校の実態等を踏まえた上で作成することを方針としており、概念的・汎用的記述が多いことで理解しづらく、あまり利用されていないからではないかと考えた。

CAN-DO リストを作成する際には、学校の実態に合わせたうえで、学校間や校種間である程度の系統性や統一性を持たせたものにする必要がある。そのためには、英語能力を学校・学年レベルごとに参照できる大枠が求められる。そこで、全ての学校が、小・中・高一貫した「県 CAN-DO リスト」を大枠として参照活用し、そこから具体化・細分化する方法で実態に合わせた学習到達目標 CAN-DO リストを作成することで、信頼性のある CAN-DO リストの効率的な作成を可能にすると考えた。

## 2 各学校「学習到達目標 CAN-DO リスト」作成方法について

中学校の学校設定「学習到達目標 CAN-DO リスト」の作成手順を、5つのステップで説明する。

第一のステップでは、学習指導要領の目標を卒業時到達目標として参照する。学習指導要領において、「3年間を通じて目指すべき目標」として示されているからである。

中学校学習指導要領外国語編の英語の目標は以下の通りである。

- (1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語を書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

第二のステップでは、県 CAN-DO リストを参照し、中学校3年間で身につける指標として示されているレベル A1.2～A2.1 をみる。中学校第1学年が A1.2、第2学年が A1.3、第3学年が A2.1 とみるのではなく、3年間でこれらの言語スキルを行ったり来たりしながら積み上げていき、卒業時に全てができるようになっていく、と考えるようにする。なぜなら、「聞くこと」の言語能力を例に挙げると、各レベルで扱っているディスクリプタ（能力記述文）が「放送などの聞き取り」「説明の聞き取り」など分野が異なる行動記述になっており、必ずしも同じ分野の行動レベルが段階的に変化した形で記述されているものではないからである。また、短いスパンでこれらの言語スキルが身に付くとは考えにくく、長いスパンで繰り返し積み上げていき、最終的に全てのスキルが育つことが望ましいと考えるからである。

### 資料1 福井県英語学習 CAN-DO リスト

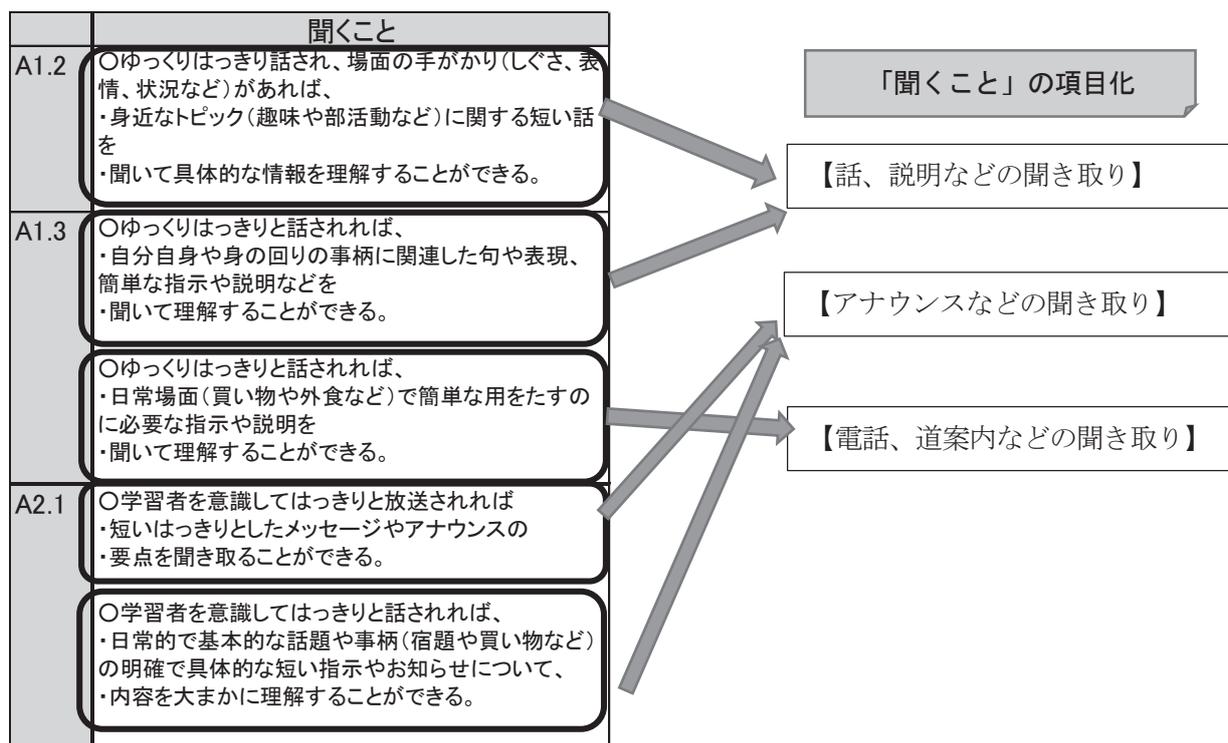
	聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと
Pre.A1	○ゆっくりはっきりと発音してもらったり、絵やジェスチャーなどの手がかりを添えてもらえたりすれば ・日常の身近な単語を聞いて理解することができる	○ブロック体で書かれた ・大文字・小文字を ・理解できる ○口頭活動ですでに慣れ親しんだ ○よく知っているものであれば	○日常の挨拶であれば ・一般的な定型の表現で ・まったり、応答したりできる ○自分についてのごく限られた情報であれば ○家や個人情報(家族や趣味など)、簡単な情報(時間、日にも、場所など)について、 ・基礎的な語句やなじみのある定型表現を使って ・伝えることができる	○アルファベットの文字・小文字であれば、 ・ブロック体で ・書くことができる。 ○単語1語ずつであれば、 ○氏名、住所、年齢など自分について最も重要な情報について ・個人情報が含まれるアンケートなど項目がある ・項目を埋めることができる
A1.1	○ゆっくりはっきりと話されれば ・簡単な指示や挨拶を聞いて理解することができる ○ゆっくりはっきりと話されれば	○よく知っているものであれば ・教室にある簡単な語(book)や非常に短い句(very good, eye contact)を ・理解できる	○日常生活の物事について ・前もって発話することを用意した上で簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い ・簡単に発話することができる ○日常のやりとり(何が出来るかできないか、スポーツや食べ物 の好き嫌いなど)において、はっきり話されれば ・基本的な語や言い回しを使って ・理由なども含めて応答することができる	○自分の趣味や好き嫌い、経験に関連したことなどであれば ・ある程度時間をかけたり辞書を用いたりし、簡単な語や基礎的な表現を用いて ・短い句や文で書けることができる
A1.2	○ゆっくりはっきりと話され、聴取の手がかり(目で、表情、状況など)があれば、 ・身近なトピック(趣味や部活動など)に関する短い話を聞いて理解することができる。場所や時間等の具体的な情報を聞き取るができる。	○日常生活で使われる非常に短く簡単な ・ポスター、招待状、メールなどのメッセージや文章を ・読み、理解することができる。	○日常生活の事実や限られた日常のトピックについて ・何をもって発話することを用意した上で、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、 ・複数の文で描写したり、理由も含めて述べたりできる ○なじみのあトピック(趣味、部活動など)に関して、はっきりと話されれば ・基本的な語や言い回しを使って ・質疑応答しながら、やりとりをすることができる ○日常生活の物事において ・基本的な語や言い回しを使って ・人を誘ったり、誘いを受けたり、断ったりすることができる	○身近な場面や個人的な内容であれば、 ・又文を簡単な構文でつないで、基礎的な日常生活の言葉、簡単な表現を用いて ・私的な手紙、メッセージ、事物の説明文(それが何か)などのまとまりのある文章を書くことができる
A1.3	○ゆっくりはっきりと話されれば、 ・自分自身や身の回りの事柄に関連した句や表現、簡単な指示や説明ができる ・聞いて理解することができる。 ○ゆっくりはっきりと話されれば、 ・日常場面(買い物や外食など)で簡単な用をたすのに必要な指示や説明を ・聞いて理解することができる。	○イラストや写真も参考にしながら、複雑でない文章構造と簡単な語で書かれた ・個人的に意味のあるトピック(スポーツなど)に関する文章や短い物語を ・理解することができる。	○身近なトピック(自分、学校、地域など)について、 ・一連の簡単な語句や文を使って、写真や絵などの視覚的補助となるものを利用しながら、 ・短い話や説明をしたりすることができる。 ○基本的な情報(日本の予定、伝言、授業内など)について、 ・補助となる絵やものを用い ・基本的な情報を伝え、質問したり答えたりしながら、意見を出し合ったりすることができる	○身の回りの出来事や個人的な内容に関する事柄で、誰かに語り込んだりした内容(生活、文化紹介や物語等)であれば、 ・基礎的な日常生活の言葉や簡単な表現を用いて ・簡単に描写(それがどのような様子であるか)したり、感想や意見を伝えることができる
A2.1	○学習者を意識してはっきりと話されれば ・短い話や指示、メモやアンプスの ・要点を聞き取ることができる。 ○学習者を意識してはっきりと話されれば、 ・日常的な基本的な話題や事柄(宿題や買い物など)の明確で具体的な短い指示やお知らせについて、 ・内容を大まかに理解できる。	○よく使われる簡単な一般的な語彙で書かれた、 ・日常的な簡単な文章や手紙、説明文、物語などを ・理解することができる。	○身近なトピック(自分、学校、地域など)について、 ・一連の簡単な語句や文を使って、写真や絵などの視覚的補助となるものを利用しながら、 ・短い話や説明をしたりすることができる。 ○基本的な情報(日本の予定、伝言、授業内など)について、 ・補助となる絵やものを用い ・基本的な情報を伝え、質問したり答えたりしながら、意見を出し合ったりすることができる	○身の回りの出来事や個人的な内容に関する事柄で、誰かに語り込んだりした内容(生活、文化紹介や物語等)であれば、 ・基礎的な日常生活の言葉や簡単な表現を用いて ・簡単に描写(それがどのような様子であるか)したり、感想や意見を伝えることができる
A2.2	○学習者を意識してはっきりと指示されれば ・一連の行動(スポーツ、料理、工作)の指示を ・聞いて指示どおりに行動することができる。 ○学習者を意識してはっきりと指示され、視覚的な補助(実際のビデオや写真)があれば	○簡単な文章で書かれていたり、 ・日常的な話題(生活、趣味、スポーツ等)についてのある程度長めの文章や、実用的・具体的な内容の文章(旅行ガイドブック、パンフレット等)を ・読み、内容を理解することができる	○身近なトピック(自分、学校、地域など)について、 ・一連の簡単な語句や文を使って、写真や絵などの視覚的補助となるものを利用しながら、 ・短い話や説明をしたりすることができる。 ○基本的な情報(日本の予定、伝言、授業内など)について、 ・補助となる絵やものを用い ・基本的な情報を伝え、質問したり答えたりしながら、意見を出し合ったりすることができる	○身の回りの出来事や個人的な内容に関する事柄で、誰かに語り込んだりした内容(生活、文化紹介や物語等)であれば、 ・基礎的な日常生活の言葉や簡単な表現を用いて ・簡単に描写(それがどのような様子であるか)したり、感想や意見を伝えることができる

中学校  
3年間

第三のステップでは、各技能（「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」）のディスクリプタを参照して、項目化する。

「聞くこと」を例に挙げると、以下のように、A1.2～A2.1 を通して、「話、説明などの聞き取り」「アナウンスなどの聞き取り」「電話・道案内などの聞き取り」のように分類できると考える。

資料2 福井県英語学習 CAN-DO リスト【聞くこと】の項目化の例



具体的に、「県 CAN-DO リスト」を基にした各技能の項目分類の例を挙げる。それぞれのディスクリプタが示す行動記述をねらいの違いによって分類している。

資料3 各技能の分類項目の例

■聞くこと

1 【話、説明などの聞き取り】	…主に会話、説明、スピーチ、物語などの概要、要点の聞き取り
2 【アナウンスなどの聞き取り】	…主に放送されるアナウンス、CM等の必要な情報の聞き取り
3 【電話・道案内などの聞き取り】	…特定場面での定型表現の聞き取り

■読むこと

1 【事実の読み取り】	…主に概要、要点、情報の読み取り
2 【物語などの読み取り】	…主にあらすじ、要点、心情、書き手の意図の読み取り

■話すこと

1 【やりとり】	…質問したり答えたり、会話を続けたりすること
2 【発表】	…説明、考え、意見を分かりやすく伝えること
3 【電話・道案内などのやりとり】	…特定場面での適切な表現を使ったやりとり

■書くこと

1 【トピックライティング】	…説明、気持ち、考え、意見が伝わるように書くこと
----------------	--------------------------

第四のステップでは、第3学年の到達目標を設定する。第三のステップで設定した各技能の項目について、学習内容と関連を図って、細分化した行動目標を作るとよいと考える。資料4が、第3学年『聞くこと』についての具体的な目標設定の例である。

**資料4 第3学年 学年到達目標「聞くこと」**

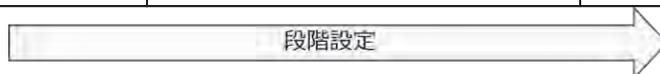
第3学年
<p><b>1【話、説明などの聞き取り】</b> 身近な話題(家族・学校・地域など)や興味・関心のある話題(社会的・科学的話題など)に関するまとまりのある話や、物語、説明などを聞いて、要点、概要や具体的な情報を理解できる。また、話し手の意図、意見などを理解できる。</p>
<p><b>2【アナウンスなどの聞き取り】</b> コマーシャル、交通情報、ラジオ番組のある程度まとまりのあるメッセージを聞いて、必要に応じてメモを取りながら、必要な情報を聞き取ることができる。</p>
<p><b>3【電話・道案内などの聞き取り】</b> 基本的な定型表現を使った電話・食事・道案内などにおける日常生活の場面でのまとまりのある英語を聞いて、状況に応じた表現を理解し、概要や要点を聞き取ることができる。</p>

第五のステップでは、第3学年の到達目標をゴールにして、段階的なCAN-DO ディスクリプタを学年毎に設定していく。(資料5)

例えば、「聞くこと」【話、説明などの聞き取り】の項目であれば、第1学年で「…場面の手がかりがあれば…その主な内容を理解することができる」、第2学年で「…要点や概要を理解できる」、第3学年で「…要点、概要や具体的な情報を理解できる。また、話し手の意図、意見などを理解できる」のように段階設定ができる。

**資料5 学習到達目標「聞くこと」【話、説明などの聞き取り】の学年つながり**

第1学年	第2学年	第3学年
<p><b>1【話、説明などの聞き取り】</b> ゆっくりはっきり話され、場面の手がかり(しぐさ、表情、状況など)があれば、身近なトピック(趣味や部活動など)に関する短い話を聞いて、その主な内容を理解することができる。</p>	<p><b>1【話、説明などの聞き取り】</b> 自分自身や身近なことにに関する話題(家族・学校・地域など)や、興味・関心のある話題(社会的・科学的話題など)に関する簡単な短い話や説明を聞いて、要点や概要を理解することができる。</p>	<p><b>1【話、説明などの聞き取り】</b> 身近な話題(家族・学校・地域など)や興味・関心のある話題(社会的・科学的話題など)に関するまとまりのある話や、物語、説明などを聞いて、要点、概要や具体的な情報を理解できる。また、話し手の意図、意見などを理解できる。</p>



以上のような5つのステップで、他の技能についても項目を設定し、学年ごとの段階設定を行うことができる。

これらの「福井県英語学習 CAN-DO リスト」をはじめとする各資料は、福井県教育研究所ホームページ内の「英語ユニット」のページに掲載した。(福井県教育研究所URL <http://www.fukui-c.ed.jp/~fec/>)

**3 分析と考察**

文部科学省初等中等教育局のCAN-DO リスト作成の手引きによれば、「卒業時の学習到達目標を設定するため、各学年段階における指導や評価に資するよう、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの目標として、4技能を用いて『～することができる』という形(CAN-DO リストの形)で設定することが望ましい」と述べられている。その際、例えば、「能力記述文の書き方や各目標の難易度に基づいた配置について、全体的な能力発達段階を示している『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)』やCEFRを踏まえた国内における取組、外部検定試験の実施団体が開発した『CAN-DO リスト』等を参照することが可能である」と述べられている。国際的な言語能力指標CEFRのレベルを基にした「県CAN-DO リスト」を参照した学年到達目標設定の方法は、学習指導要領が示す目標との関連を図りながら、具体化していく設定方法であることから、まさに文部科学省が手引きで示している方針に合っているものと考えられる。

4技能それぞれの項目の分類については、さまざまな視点でのとらえ方が可能であり、各学校の外国語担当教員全員が、生徒や学校の実態を踏まえ、育成したい能力や生徒像に基づいて協議した上で設定するとよいと考える。

#### 4 課題と今後の方針

中学校の学年到達目標 CAN-DO リストの設定を例に挙げてモデルとして示したが、今後は、高等学校と小学校の CAN-DO リストの設定についてもモデルを示していかななくてはならない。高等学校においては、学校によって扱う教科書が違うことや、普通科、職業学科などによってレベルが様々であることが、CAN-DO リスト設定のモデルを示すことの難しさになっている。そこで、1つの教科書を取り上げてモデルを作成していくことを検討している。また、小学校については、まだ教科化されていない現状において、言語スキルとしての目標設定という概念がないと言える。しかし、現行の外国語活動でも、「話すこと」「聞くこと」の2技能だけでも CAN-DO リストに基づいた指導を行うことは、指導者が具体的な目標を持って指導計画を立てることや児童の学びの見取りの観点が明確になることが可能になり、また児童のコミュニケーションへの意欲や態度の向上につながることも期待できる。まずは、現状での外国語活動における2技能についての CAN-DO リストの設定モデルを示していき、今後の教科化に備えて4技能の CAN-DO リスト設定についても到達目標レベルを十分に検討していきたい。

### Ⅲ CAN-DO リストを活かした目標と指導と評価の一体化モデルの開発について

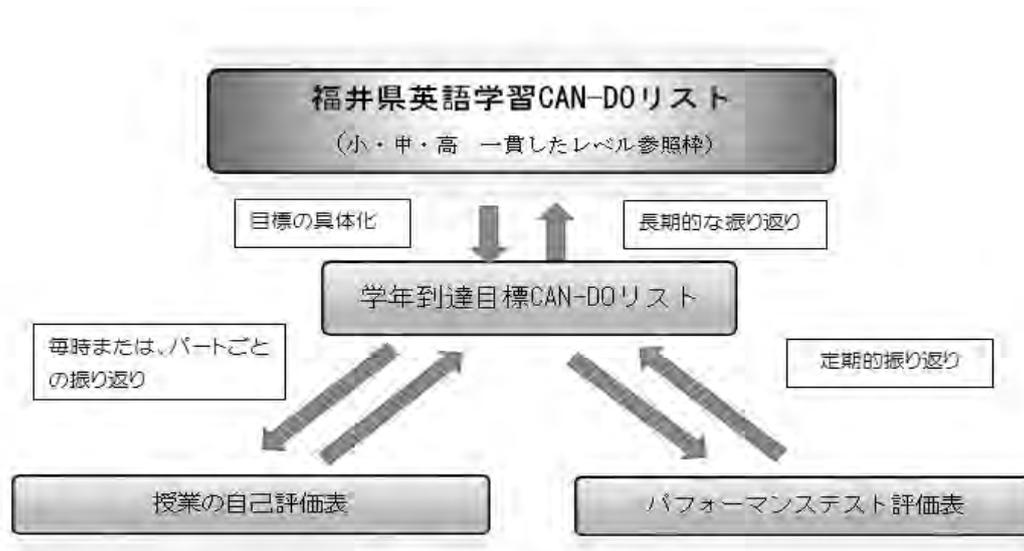
#### 1 目標と指導と評価の一体化モデル開発の背景

各中・高等学校が CAN-DO リスト形式の到達目標設定を行っているが、実際に指導と評価の改善に十分活かされていないといった課題がみられる。学校で作成した CAN-DO リストが形骸化してしまう原因は、CAN-DO リストを指導と評価に活用する具体的な方法が示されていないからだと考える。そこで、学校作成の学年到達目標 CAN-DO リストを授業で活かし、目標と指導と評価を一体化するモデルを示すことにした。

#### 2 目標の指導と評価の一体化モデルについて

「県 CAN-DO リスト」を活用した目標と指導と評価の一体化のモデルを図示すると、資料6のようになる。

##### 資料6 県 CAN-DO リスト活用モデル



児童・生徒が CAN-DO リストを活用することで、期待される変容は、まず、「県 CAN-DO リスト」をベースとして長期的な学びの見通しが持てるようになることである。その CAN-DO 目標を具体化した学年到達目標に向かって日々の授業の学習を進め、授業後に CAN-DO 目標に沿った自己評価表で振り返りを行う。そうすることで、自己の学びを深く考察し、常に CAN-DO 目標を意識した取組みができる。さらに定期的なパフォーマ

ンステストで、学年到達目標の到達までにどれだけできるようになったかを確認できるようにしている。パフォーマンステストはやりっぱなしではなく、自己評価の機会と教師から適切なフィードバックの機会が保証され、それらをもとに、再び自らに合った目標を持って進められるようになっている。長期的な目標としての「県 CAN-DO リスト」があり、中期的な目標としての「学年到達目標」がある。そして、日々の取り組みからの振り返りと、定期的なパフォーマンステストにおいて、自己の取り組みと到達度を確認し、主体的な学びのサイクルができていけると言える。

教師側の立場で一体化モデルをみると、「県 CAN-DO リスト」の活用で、長期的なスパンで学びのつながりを意識し、小中連携、中高連携を視野に入れた指導の改善ができる。また、学年の到達目標が CAN-DO 形式でコミュニケーションスキルとして英語を使える力の育成をねらっているため、必然的に言語活動中心の指導へと改善が図られる。英語をコミュニケーションスキルとして使える力を測るために、ペーパーテストで知識を測るばかりではなく、パフォーマンステストを必然的に重視することになり、評価の改善へとつながる。この一体化モデルでは、児童・生徒の自己評価も教師の指導のフィードバックとして活用され、さらなる指導改善のサイクルができていけると言える。

### 3 CAN-DO リスト活用モデル実践のための準備

#### (1) 児童・生徒版「県 CAN-DO リスト」について

「県 CAN-DO リスト」を児童・生徒にとって分かりやすい表記に改訂したものを児童・生徒版「県 CAN-DO リスト」(資料7)として作成した。ディスクリプタの表記を分かりやすく書き換えただけでなく、目安としておよその学年ごとのレベルも入れている。児童・生徒は、リストを見ることによって現在自分が取り組んでいるレベル、これまで学習してきてできるようになっているレベル、これから先に学んでいく目標が分かり、英語学習の見通しが持てるようになっている。生徒が学びの見通しを持ち、定期的な振り返りで自己の学びを常に認識することは、主体的に学んでいく意欲や態度の育成のために有効であると考えられる。

児童・生徒版「県 CAN-DO リスト」は、進学時、卒業時など、長期的なスパンでの目標の確認や、振り返りでの自己の達成度の確認に活用できる。また、自己の達成度を見て、個々人のレベルに合わせて目標をったり、自己に足りないスキルを把握し対策を講じたりすることも可能である。

#### 資料7 児童・生徒版「福井県英語学習 CAN-DO リスト」

##### 児童・生徒版「福井県英語学習 CAN-DO リスト」

レベル	聞くこと	読むこと	
Pre.A1 小5程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○スポーツや食べ物、動物などの単語を聞いて、その絵を探して指さすことができる。</li> <li>○1～20までの数字を聞いて、その数字を指さすことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○アルファベットの太文字・小文字を読むことができる。</li> <li>○絵本や教科書で習ったことのある単語を見て、意味が分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○あいさつ</li> <li>○～、please</li> </ul>
A1.1 小6程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○“Stand up.”“Sit down.”のような先生の指示や、“Good morning.”や“How are you?”のようなあいさつを聞いて分かる。</li> <li>○21～30までの数字を聞いて、その数字を指すことができる。</li> <li>○日付、時間、曜日などを聞き取ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○book, very good, eye contactなど、教室でよく使う単語を見て、意味が分かる。</li> <li>○絵や写真がついた看板、メニューなどに書いてある簡単な言葉の意味が分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の趣味</li> <li>○自分の表現を使</li> </ul>
A1.2 中1程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ジェスチャー、表情、話されている場面、状況が分かれば、趣味や部活動などの簡単な短い話を聞いて分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○短く簡単なポスター、招待状、メールなどに書かれている内容が分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○スポーツや理由なども</li> </ul>
A1.3 中2程度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○身近な話題、興味関心のある話題についての短い話を聞いて、理解することができる。</li> <li>○買い物や外食、電話などの場面で、簡単な指示や説明を聞いて理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○イラストや写真も参考にしながら、簡単に書かれたスポーツなどの記事や短い物語の意味が分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○趣味、部活</li> <li>○りとりをする</li> <li>○習った表現</li> <li>○とができる</li> </ul>
A2.1 中	<ul style="list-style-type: none"> <li>○短いテレビCMなどや、空港や駅などでのアナウンスを聞き、内容を聞き取ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習した単語で書かれていれば、簡単な文章や手紙、説明文、物語などを理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日常の予</li> <li>○を利用しな</li> </ul>

#### (2) 年間指導計画について

これまでの年間指導計画は、教科書内容に合わせて単元ごとの CAN-DO リストを設けた指導項目リストのような形がよく見られた。そのような形では、せっかく設定した学年到達目標 CAN-DO リストが宙に浮いた

ものになってしまう。これを、学年到達目標 CAN-DO リストと紐づけを行い、目標を達成するための指導計画に改善していくことが大切である。そこで、学年到達目標 CAN-DO リストを活用した年間指導計画のモデルを作成した。

**資料8 第3学年 学年到達目標と年間指導計画**

第3学年 CAN-DO Unit等との対応(年間指導計画)

		1～7月		
4技能	目標	レベル	活動目標	Unit等
Listening (L)	1【話、説明などの聞き取り】 身近な話題（家族・学校・地域など）や興味・関心のある話題（社会的・科学的話題など）に関するまとまりのある話や、物語、説明などを聞いて、要点、概要や具体的な情報を理解できる。また、話し手の意図、意見などを理解できる。	A1.3	まとまりのある英語を聞いて、トピックや概要・要点を捉えることができる。	各Unit
			事物や人物について紹介するスピーチを聞いて、その概要を理解したり、質問や感想を返したりできる。 友だちの日本文化や民族衣装を紹介するスピーチを聞き、その内容について質問することができる。	W-up(1) MP1
			友だちの修学旅行記や世界の遊びについてのスピーチを聞き、その内容について、質問や感想を返したりできる。	MP2
	2【アナウンスなどの聞き取り】 コマーシャル、交通情報、ラジオ番組のある程度まとまりのあるメッセージを聞いて、必要に応じてメモを取りながら、必要な情報を聞き取ることができる。	A1.3	ボランティア活動の説明を聞いて、曜日、時刻や場所など大切な情報を聞き取ることができる。	LP1
			テレビの実況中継やインタビューを聞いて、その概要・要点を聞き取ることができる。	LP2
			地図やグラフを見ながら社会の授業を聞いて、要点を聞き取ることができる。	LP3

資料8は、第3学年の年間指導計画のモデルである。左に学年到達目標 CAN-DO リストを据え、右にその学年到達目標を達成するための言語活動計画を学期ごとに羅列している。言語活動の積み上げが、学年末に CAN-DO 目標の達成につながることを意図している。この年間指導計画を作成するには、教科書の単元から、各学年到達目標 CAN-DO 項目に関連する言語活動を取り上げ、計画をしなければならぬ。CAN-DO 形式の目標が、「英語を使って何ができるか」という行動目標である以上、指導計画も、その目標到達のための言語活動計画になると考える。教科書を教えるのではなく、教科書の題材を CAN-DO 目標に合わせて指導者がどう教えるかが問われる。よって、CAN-DO リスト活用によって教師の指導を型にはめたり、縛ったりするのではなく、目の前の生徒に合わせた教師一人ひとりの創意工夫を生かした授業ができると考える。日々の指導が、常に学年到達目標 CAN-DO リストとつながっていることを意識したい。

(3) **児童・生徒用学年 CAN-DO リスト**について

各学校が設定した学年到達目標 CAN-DO リストは、児童・生徒と共有を図るべきであると考え。先ほど述べたとおり、常に学びの見直しを持ち、自己を振り返るメタ認知を通して、主体的な学びが実現するからである。そこで、児童・生徒が目標を明確にし、日々の学びが目標到達を意識したものになり、定期的に自己の達成度を把握できるような児童・生徒用の学年 CAN-DO リストのモデルを作成した。資料9は、中学校2年生を対象に作成したものである。4技能ごとのバルーンで目標を示しているので、定期的な振り返りで達成したところは色付けなどを行うことで、達成度が視覚的に実感できるようにした。活用例としては、学年開始時期に目標を共有し、定期テストやパフォーマンス

**資料9 児童・生徒用学年 CAN-DO リスト**

**2年生 CAN-DO リスト - ふり返り**

Grade	Class	Name

**聞くこと**

①自分のことや身近なこと、興味・関心のあることに関する短い話や説明を聞いて、おおまかな内容やポイントが分かる。話されている内容について、相違や質問を返すことができる。

②アナウンスや、ニュースやラジオ番組のメッセージを聞いて、必要に応じてメモを取りながら必要な情報を聞き取ることができる。

③日常場面（電話、案内など）における、決まった表現を使ったやりとりを聞いて、必要な情報が分かる。

**読むこと**

①絵や写真などをヒントにして、身近なことや興味・関心のあることに関する英文を読んで、大まかな内容やポイントが分かる。また、書き手の言いたいことが分かる。

②絵や写真などをヒントにして、物語を読み、あらすじやポイントが分かる。また、書き手の言いたいことが分かる。

**書くこと**

ンテスト後など、定期的に到達度を見たり、目標を再確認したりしていくことに用いることができる。

資料9の「聞くこと」について見てみると、① ② ③と三つのバレーンがあるが、それが、学年到達目標 CAN-DO リストの「聞くこと」の三つの項目①【話、説明などの聞き取り】、②【アナウンスなどの聞き取り】、③【電話、道案内などの聞き取り】の内容と一致していることが分かる。

(4) 「授業の自己評価表」について

授業の振り返りに使う自己評価表は、授業時間に余裕がないため使用されていない、または、使用されていても、その内容は「できた」「できなかった」を問うものや、「積極的に取り組めた」「積極的に取り組めなかった」など、感覚的で曖昧な問いであるものが多いと言える。CAN-DO 目標を意識した指導の実現のためには、自己評価を行うことはとても有効であると考え。生徒は、その日その日の授業が、どの CAN-DO 目標を意識したものであるかを認識した上で見直しをもった取組みができる。授業の中での自己の行動を具体的に振り返ることで、CAN-DO 目標到達までの形成的評価として、自己が今どれくらいまでできるようになっているかを確認することができるのである。

「できた」「できなかった」ではなく「ここまでできるようになっている」という「できる感」を実感できるように、自己評価表にループリック形式を取り入れた。評価基準には、その日の授業の活動を踏まえ、できるだけ具体的な行動記述によって段階を示すことが望まれる。基本的には4段階が望ましいと考える。第1段階は「まだ難しい」とした。「できない」という記述よりも、「できるようになりつつある」段階を意識し、肯定的な表現にしている。第2段階は「何らかの手助けがあればできる」とした。この段階は、「手助け」部分の記述を熟考して設定したい。例えば「教科書を見ながらであれば」「先生の助けがあれば」「辞書を使えば」等が考えられる。生徒にとって、目標に到達するための手立てを示すことにもなる。第3段階は、全員が目指すべき目標とする。第4段階は、学習意欲や能力が高い生徒にとってのチャレンジ目標とする。この段階も、教師による熟考した行動記述で基準を示す必要がある。どのような目標であれば、英語力の高い生徒にとって意欲が高まるものになるかが大切である。例えば「さらに一言を付け加えることができる」「すらすらと言える」「教科書を見なくてもできる」「意見・感想を付け加えられる」等が考えられる。このような段階を設けることで、生徒自身が自分のレベルに合わせて目標設定をすることや達成感を得ることを可能にする。英語力の低い生徒はいつまでたってもやる気が出ず、英語力の高い生徒にとってはつまらなくて、やはりやる気が出ないといった授業風景がよく見られるが、そのような課題の解決にもつながるであろう。自己評価表には、活動と合わせて学年到達 CAN-DO も記載して、その日の目標だけでなく、中期的な目標も常に意識できるようにした。

資料10は、New Horizon2 の Warm-up の単元における言語活動を想定した自己評価基準の例である。

**資料10 授業後の自己評価表**

②今日のコミュニケーション活動（「誕生日プレゼントについて」友達とやりとり）を振り返りましょう。

【話すこと①】

レベル	できる度	Check!
1	友だちの誕生日プレゼントについての話を聞き取ることがまだ難しい。	
2	自分の誕生日プレゼントについて、教科書を見ながら、友だちに1文で伝えることができる。	
3	自分の誕生日プレゼントについて、友だちに分かるように、自分の力で詳しく説明することができる。	
4	自分の誕生日プレゼントについて伝え、また、友だちの誕生日プレゼントの話を聞いて質問したり応答を返したりして、会話を続けることができる。	

(5) 「パフォーマンステスト評価表」について

到達目標が CAN-DO 形式の行動目標である以上、評価はペーパーテストで「読む」「書く」「聞く」の3技

能や英語の知識だけで行うわけにはいかない。パフォーマンステストで実際に英語を運用する力や表現する力などの「話す」技能を見ることが必要である。

今日では、インタビューテスト、スピーチ、エッセイライティングなど、パフォーマンステストを実施している学校は少なくない。しかし、その評価は、ALTに任せきりである、指導者の主観で評価基準が決まる、フィードバックが不十分である、生徒個人のフィードバックにとっても手間がかかる等の課題が見られる。インタビューテストを例に挙げれば、生徒にとっては、「なんとなくALTとしゃべって楽しかった」程度の実感しかなく、達成感を十分に得られていないことが考えられる。CAN-DO 目標を意識させれば、生徒は見通しを持った取組みができ、テスト後には、自己を振り返って達成度を確認できる。また、適切なフィードバックを得ることで次の目標を新たにすることが可能になるのではないだろうか。そこで、CAN-DO 目標を意識したパフォーマンステスト評価表のモデルを作成することにした。

パフォーマンステスト評価表にもループリックで段階的評価基準を具体的に行動記述することを取り入れた。この評価表の基準を事前に教師と生徒で共有する。生徒は「何を頑張れば、どれだけ評価されるか」が明確になり、テストに取り組みやすくなる。個人のレベルに合わせて目標設定が可能であり、苦手意識のある生徒や、能力が高い生徒にとっても意欲が向上する。テスト後は、生徒はその評価表を用いて、自己評価を行う。自己の行動を振り返ることが主体的に学ぶ意欲となる。教師は同じ評価表で実際に評価し、テスト後は評価を返却する。評価基準の記述が、具体的であればあるほど、教師が生徒をより正確に評価することができ、生徒にとってはその評価をそのままフィードバックとして活用することができるのである。生徒は自分にとって足りない力や、達成した力を振り返り、次の目標を明確にすることができる。これまで個人のフィードバックに細かいコメントを添え、手間がかかっていた教師にとっては、個人のフィードバックが迅速にでき、効率が上がると考えられる。その中でも

インタビューテストの評価表を例として掲載する。

資料11のとおり、表現の能力の評価の得点は、〈正確さ〉よりも〈流暢さ〉を高くしてある。生徒の間違いを恐れずに積極的に話そうとする意欲がまずは大切であると考え、中学生という発達段階も考慮し、工夫をした点である。同様の理由で、関心・意欲・態度の配点も高くしている。

資料11 インタビューテスト評価表（生徒用・教師用）

項目	CAN-DO目標	レベル	得点	
関心 意欲 態度	〈積極性〉 アイコンタクト アイコンタクトをして会話することができる。	A+	会話の間、常にアイコンタクトや相づちが自然にできる。	7
		A	会話の間、アイコンタクトがだいたいできる。	5
		B	会話の間、アイコンタクトが半分くらいはできる。	3
		C	アイコンタクトがほとんどできない。	1
関心 意欲 態度	〈話し方〉 声の大きさ 相手に分かりやすく、はっきりと聞こえる声で話すことができる。	A+	相手にはっきりと聞こえる声で話し、気持ちがかもっている。	7
		A	相手にはっきりと聞こえる声で話すことができる。	5
		B	相手に一応聞こえる声で話すことができる。	3
		C	声が小さくて、伝わらない。	1
場面設定テスト① 表現	〈流暢さ〉 すらすら言える 内容の質 小さなミスはあっても、相手に伝わる内容ですらすら言えて、必要な用事を果たせる。また、場面にふさわしい表現を使う。	A+	ふさわしい表現を用い、すらすら言える。1文を付け足すことができる。	7
		A	ふさわしい表現を用い、すらすら言える。分からなくても聞き返せる。	5
		B	少し間が空いたりするが、なんとか伝えられる。	3
		C	会話が止まってしまう。	1
場面設定テスト① 表現	〈正確さ〉 正しく答える 正しい英語(文法)で伝えたり答えたりすることができる。	A+	英語らしい発音で、正しい英文で言える。	3
		A	正しい英文で言える。	2
		B	少し間違えたり、単語で答えたりする。	1
		C	正しく答えられない。	0

#### 4 中学校における CAN-DO リスト活用モデルの実践

CAN-DO リストを活用した目標と指導と評価の一体化を図るため、作成したモデルを研究協力校において実際に活用し、その効果を検証した。

##### (1) 研究協力量クラスについて

福井市内の1中学校、2年生33名（男子17名、女子16名）の1クラスである。

学年当初の様子と、指導者からのコメントでは、英語に苦手意識を持つ生徒が多く、自ら積極的に発言する生徒がほとんど見られないが、授業にはまじめな態度で臨んでいる生徒が多く、苦手意識を持ちながら

も、英語ができるようになりたいと考える生徒が多いクラスであると言える。

(2) 実施期間

平成 27 年 4 月～12 月

(3) 実践内容

① 学年始めに、「県 CAN-DO リスト」、学年到達目標 CAN-DO リストの共有

教師が、学年始めに、児童・生徒版「県 CAN-DO リスト」を生徒に配布し、中学校を通しての学びや卒業時の到達目標を生徒と共有した。また、生徒用「第 2 学年 CAN-DO リスト」も配布し、1 年後の到達目標を生徒と共有した。

② 単元の中のパート（2～3 時間に 1 回）ごと授業の自己評価表を活用

使用教科書は *New Horizon2* である。それぞれの単元の Starting Out、Dialog、Reading for Communication 等のパートごとに自己評価を行った。実践前に、研究協力校の英語科担当教員から、学校や生徒の実態に合わせた希望や要望を聞き、自己評価表の形を変更することになった。変更した点は以下のア～ウである。資料 12 はその変更バージョンの一部である。

**資料 12 自己評価表（変更バージョン）**

今日の授業での自分を振り返り、今の自分ができるようになっているレベル(0～4)に○をつけましょう。

1【今日の授業の取り組み】

<b>0</b> 	<b>1</b> 	<b>2</b> 	<b>3</b> 	<b>4</b> 
				
・授業に参加できなかった。	・参加はできていた。ただ聞いていただけ。	・よく聞いていた(うなづく、教科書を開く、ノートをとる)。 ・友達や先生の手助けがあれば、なんとか自分の意見や質問を1回は言えた。	・よく聞いていた。 ・自分の意見や質問を、ペアワークやグループ活動、全体の中で1回は言えた。	・よく聞いていた。 ・自分の意見や質問を、ペアワークや全体の中で、2回以上言えた。

2【Reading for Communication 本文内容理解(読むこと①)】

<b>0</b> 	<b>1</b> 	<b>2</b> 	<b>3</b> 	<b>4</b> 
				
・本文の内容を読んでいない	・本文の内容が、先生の説明を聞いても、意味を理解することが難しい	・本文の内容が、先生の説明を聞いて、半分くらい分かる。	・本文の内容が、一度読んで、だいたいの意味が分かる。	・本文の内容が、一度読んで、全て分かり、どんな話を説明したり、感想を述べたりできる

ア 毎時の授業で行う言語活動の具体的な振り返り記述から、汎用的な行動記述への変更

振り返りは、できるだけ授業の活動と密着した内容で、具体的に活動に参加した行動を振り返ることのできる記述が望ましいと考えていたので、こちらの意向とは若干ずれがあった。しかし、忙しい教員生活と、流動的な授業の流れに臨機応変な対応をすることを考慮すると、このような汎用バージョンがより現場に即した自己評価表であるとも言える。

イ レベルをイラスト表示に変更

文字が多いとそれだけで面倒になってしまう中学生が多いという意見をいただき、生徒にとって文字ではなく、視覚的にレベルが分かりやすい工夫として、イラスト表示をより多く取り入れた。

ウ 意欲・態度の自己評価項目の追加

CAN-DO 目標は基本的に、言語理解の能力と、言語表現の能力について用いられるが、中学生にとって積極的な授業参加を抜きにしては能力向上は望めないという見方から、授業への参加や取組みについての意欲・態度面の項目も取り入れた。

③ Speaking Plus 3 での自己評価表を用いた授業の実践例

道案内についての単元である。ここでの CAN-DO は「年間指導計画」を参照すると、「目的地への乗り物（バスまたは電車）での行き方を尋ねたり、教えたりすることができる」である。

ここで用いた自己評価表の項目は次のとおりである。

【本文ロールプレイ（話すこと ③）】・・・（話すこと ③）は資料9とリンクしている

第0段階「ロールプレイに参加しなかった」

第1段階「本文の会話を、教科書を見ながらでも、まだ表現することが難しい」

第2段階「本文の会話を、ときどき教科書を確認しながら、表現することができる」

第3段階「本文の会話を、教科書を見ずに、はきはきと表現することができる」

第4段階「本文の会話を、教科書を見ずに気持ちをこめて、自信を持ってすらすらと表現でき、1文を付け足すことができる」

【自己表現活動（話すこと ②）】・・・（話すこと ②）は資料9とリンクしている

第0段階「活動に参加しなかった」

第1段階「まだ、習った表現（文法）の意味や使い方を理解することが難しい」

第2段階「教科書を見たり、先生や友だちに助けってもらったりすれば、習った表現を使って、相手とやりとりができる」

第3段階「習った表現（文法）の意味や使い方がわかり、それを使って、相手とやりとりができる」

第4段階「習った表現を使って、相手とやりとりができる。さらに、1文を付け足して、会話を続けることができる」

授業では、新出単語や新出文型などの基本事項の導入、練習の後、ワークシートを用いて行き先やバス番号などを伝えるペアワークを行った。

自己評価表を用いた授業を繰り返すことで、生徒は到達目標を意識して活動に取り組むことができた。本文ロールプレイを行う際には、教科書から時折顔を上げ、相手の顔を見ながら話そうとする生徒も見られた。ペアワークにもしっかりと取り組み、“Oh, I see.” とあいづちを打ったり、会話の最初と最後に“Hello.”、“See you .” などあいさつをしたりするなど、表現をつけ加えた生徒もいた。

授業の最後に自己評価表を用いて、ルーブリックの段階を見ながら評価を行った。

【本文ロールプレイ】に関しては、第3段階に到達した生徒は3名、第4段階は13名、クラスの目標到達レベルの平均は2.8であった。教科書を見ずに話すことまでは到達できなかったが、ときどき確認する程度に努力し、第2段階に到達した生徒も多かった。

【自己表現活動】に関しては、第3段階に到達した生徒は13名、第4段階は9名、クラスの目標到達レベルの平均は3.0であった。ペアワークのときに相手の目を見て話したり、本文ロールプレイ同様に表現をつけ加えたりするなど、活発にやりとりする様子があった。

④ インタビューテスト実施における、インタビューテスト評価表の活用

実施形式は、ALT と生徒の1対1のインタビューテストである。内容は、2つあり、1つ目は道案内か電話のどちらかの場面設定のタスクカードを引き、タスクを満たせるように会話をする。2つ目は、ALT

が学習内容に関連した質問を投げかけ、それに答えることと、会話を続けることである。実施方法は、事前準備として、インタビューテストの内容の確認と、評価表の共有である。テスト内容と評価表を事前に確認することで、生徒に目標と評価の観点を明確にし、具体的な取組みができるようにした。ALT には、生徒用と同じ評価表の英語版を用意し、テスト前に JTE と評価基準について共有を図った。テストは、JTE が通常の授業を行っている間に、一人ずつ ALT と面談する形で行った。評価は ALT 一人が行い、インタビューの様子をビデオ撮りしたものをのちに JTE が確認できるようにした。一人の生徒のテスト時間は2分程度であり、2時間の授業時間を使った。テスト直後に、生徒は自分のパフォーマンステストの達成度を自己評価表に記入して提出した。ALT の評価表は JTE がチェックした後、生徒に自己評価表とともにフィードバックとして返却された。

資料 13 インタビューテスト ALT 用評価表

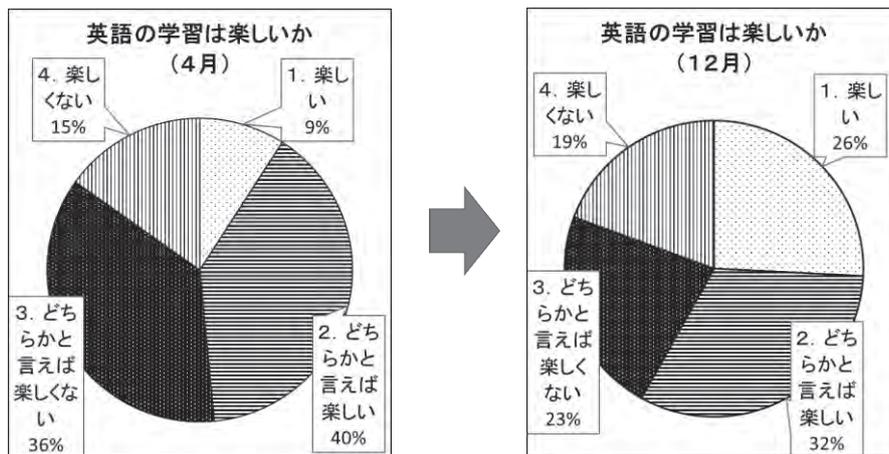
Item	CAN-DO	Level	
attitude Eye Contact	can make eye contact during the conversation	A*	S can make eye contact and appropriate responses naturally while speaking.
		A	S can make eye contact but sometimes can't during the conversation.
		B	S can make eye contact during the half of the conversation.
		C	S can't make eye contact.
Clarity of Voice	can speak clearly with appropriate volume	A*	S can speak clearly with appropriate volume and with emotional accents.
		A	S can speak clearly with appropriate volume.
		B	S can't speak clearly but it is understandable.
		C	S can't speak clearly and it isn't understandable.
Fluency	can speak fluently and appropriately at the scene and communicate well despite making a few mistakes	A*	S can speak fluently and appropriately and add one more sentence.
		A	S can speak fluently and appropriately. S can naturally request repetition.

## 5 中学校における CAN-DO リスト活用モデル実践の結果分析と考察

### (1) アンケートによる意識調査の結果分析と考察

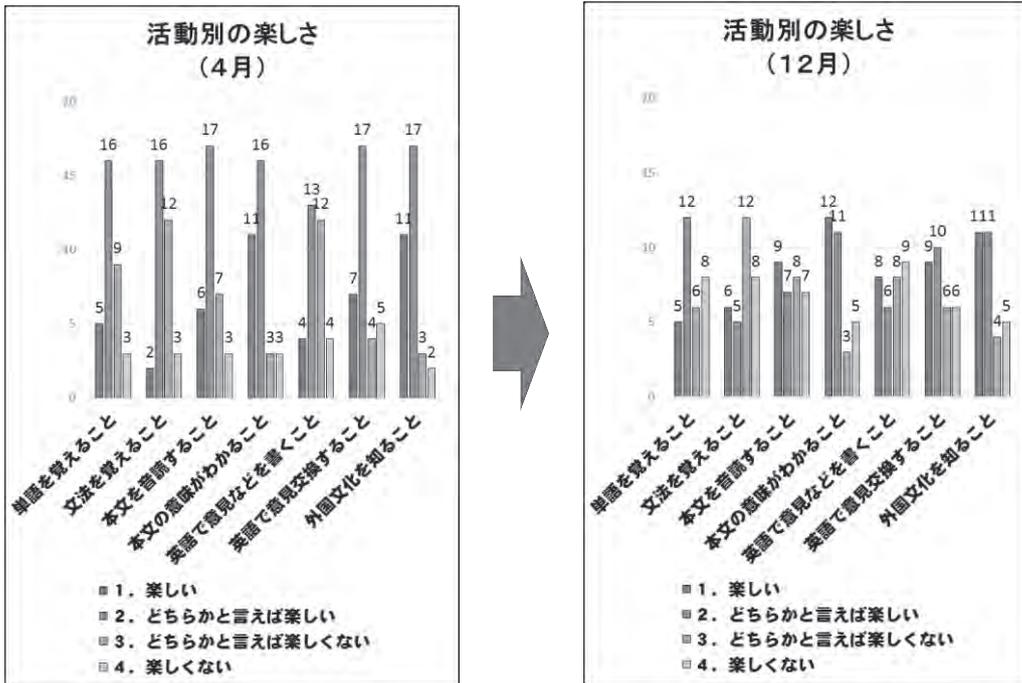
4月（実践前）と12月（実践後8ヶ月経過）に行った同一内容のアンケートの結果を比較した。

資料 14 「英語の学習は楽しいか」に関するアンケート結果



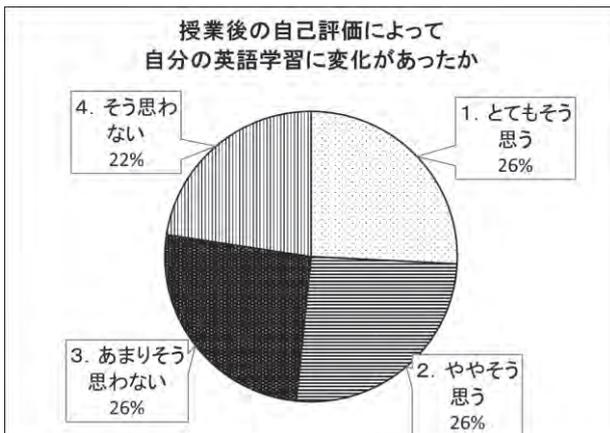
「英語の学習は楽しいですか。」という質問項目に関しては、「楽しい」と答えた生徒が9%から26%に大きく上昇した。通常、中学2年生の学習内容は極端に増加し難化もするので、この時期は例年英語嫌いが増えていくと言われている。このことを考慮すると、CAN-DO リストを活用した取組みによって、ある程度の指導改善による、生徒の意識の変容を生み出したと考えられる。

資料15 「どのような活動を楽しみと感じるか」に関するアンケート結果



そこで、どのような活動を「楽しい」、または「楽しくないのか」と感じるか、というアンケートを7種類の活動において実施し、その結果を同様に比較した。「英語を使って友達と意見交換をすること」の項目において、「楽しい」と感じる生徒の増加を期待したが、活動ごとに特徴が表れることはなく、どの項目においても同じような変化を示した。ほぼ全ての活動において、「楽しい」と感じる生徒が増えたのに対し、「どちらかと言えば楽しい」と答えた生徒は大きく減少した。CAN-DO 目標をベースにすることで、指導が言語活動中心になり、一部の生徒にとっては、活動が有意義なものであると感じ、その他の生徒にとっては、負担感が大きくなったのかもしれない。

資料16 「授業後の自己評価の効果」に関するアンケート結果



授業後の自己評価について12月に生徒対象のアンケートをとった結果である。『授業後の自己評価をすることで、しないときと比べて、自分の英語学習に何か変化はありましたか。』という質問に、肯定的な意見と否定的な意見がほぼ半分に分かれる結果となった。肯定的理由としては、「その時間に習ったことを思い出せるから」、「自分の中で何ができなかったのかを見つめ直し、改善することができるから」、「自分の評価が低いとこれから直そうという気になるし、前回との取組み方が変わるから」、などが代表的であった。否

定的理由としては、「英語自体分からないから自己評価ができない」、「自己評価をしても英語ができるようになるわけじゃないから」などが目立った。自己肯定感を高めるための自己評価表を作成したつもりであったが、さらに工夫が必要であると感じた。

このことに関して、第2回CAN-DOリスト研究会において投野教授から指摘があったのは、自己評価表の文言が抽象的かつ一般的であり、達成度を実感しにくいという原因が考えられる、ということである。例えば、教科書の中のSpeaking Plusという話す活動に重点を置いた授業のときには、『習った表現の意味や使

い方が分かり、それを使ってやりとりすることができる』という内容を自己表現活動のレベル3に設定した。生徒たちは Speaking Plus の授業のときには毎回これと同じ自己評価表を使うことになるので、新鮮味がなくなり、自己評価そのものが形骸化してしまったりも否めない。具体的な文法項目を提示し、その文法を使ってどの程度まで自己表現できたか、ということに焦点を当てた自己評価を実践するとともに効果的に機能したろう、とご助言いただいた。汎用バージョンの自己評価表には、教師によっては使いやすいものであるが、その日の言語活動と密着した CAN-DO 目標を、ターゲットとなる文法表現や語彙も含めた形で、具体的な記述で示した自己評価表を今後工夫していく必要があると言える。

(2) 生徒の授業後自己評価自由記述からの分析と考察

授業の自己評価については、生徒が自己評価表の自由記述欄に記入した内容を、開始当初と現段階とで比較し、その変化からも効果を分析した。記述内容が開始当初から大きく変化した生徒が多かったため、その例を資料 17 に示す。

**資料 17 自己評価表の生徒の自由記述**

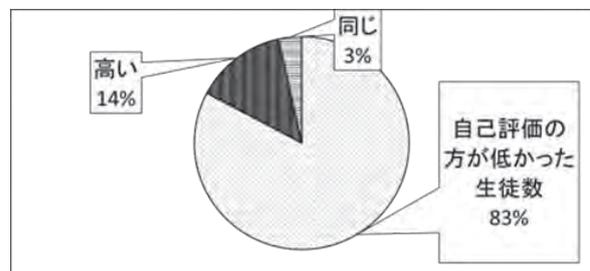
<p>「楽しかったです」 →「大きな古時計には物語があったことをはじめて知った。When を使う文など接続詞が多く難しいところもあった。」</p>
<p>「本文の内容を理解することができた。」 →「大きな古時計のことは、あまり知らなかったけど今日の学習で知らないことが分かって良かった。」</p>
<p>「いい感じにできた。」 →「take にも色々な使い方があり、シチュエーションに対応して使い分けなければならないのが難しいと思いました。」</p>
<p>「楽しかったです。」 →「活用できる英語が多いので機会があったら生かしていきたいです。」</p>

このように、初期段階では漠然とした記述が多かったが、回を重ねるごとに具体的な記述が増えた。自己評価をすることで自分の達成度を客観的に判断し、次の目標を設定する生徒が出てきたと考えられる。

(3) インタビューテストの結果分析と考察

資料 18 は、自己評価の点数と実際の点数との比較を表している。生徒 29 名中 24 名が ALT の評価よりも自己評価が低かった。自身の英語力に自信がないことがうかがえる。自己評価の低い生徒の多くは、答えるのに時間がかかったり、スラスラ言えなかったりしたと感想を述べていた。しかし、ALT は、会話を何とか続けようとしたり、“Speak slowly.” などと伝えたり、コミュニケーションとしてはある程度成立していた生徒が多かったと感想を述べていたことから、ALT の評価は生徒より高めのものになったと考えられる。教師が採点した評価表を返却する際に、自己評価よりも実際の点数が高かったことで喜んでいたり生徒が多かった。自己評価をしていたからこそ、返却された結果と比較をすることで、自信をつけることができたと言える。今後もこのような評価を繰り返すことで、達成感を味わい、自己肯定感の向上につながっていくことが期待できるだろう。

**資料 18 自己評価の点数と実際の点数との関係**



インタビューテストの評価に、やや課題もみつかった。少数ではあるが、生徒の自己評価よりも、ALT の

評価の方が低かったものがあった。実際にその生徒のインタビューの様子を見ていると、会話を比較的長く続けており、英語コミュニケーション能力としては高く感じられた。JTEの認識では、評価は高いものであったが、ALTとの認識とずれがあったと言える。ALTによれば、英語の正確さの点で見ると、英語表現のミスがあったということであった。私たちが作成した評価表では、単純な質問に、“Yes, I do.”などで、正しく答えることと、“What do you think?”のような、高度な返答が求められるものとは、英語表現の質的には大きく異なることが考慮されていなかった。内容に意識が向けば、文法に気が回らなくなることも考慮されていなかった。これらの課題に対して、今後は、英語の質的な面も考慮して、語彙や表現のレベル、内容面でのレベルも配慮できるような評価表の改善をしていく必要がある。

(4) インタビューテスト後のアンケートによる意識調査の結果分析と考察

『インタビューテストでは、テスト前に自己評価表で採点のポイントを確認し、テストの後に自己評価をした。このような自己評価を行うことは、効果があったと思いますか。』という質問に対する回答である。

「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した生徒が全体の7割を超えている。授業後の自己評価のアンケートに比べ、かなり支持率が高かった。

肯定的理由としては、「自分の評価と先生の評価を比べて、自分の欠点を見つけることができるから」、「事前にどうすれば良い評価をもらえるか確認して目標を定められるから」、などが代表的だった。自己評価と教師の評価を同時に返却することで、両者をその場で比較することができ、生徒にはその差がはっきり分かりやすかったと考えられる。さらに、前述のとおり、自分の評価よりも実際の評価の方が良かった生徒が多かったため、自己肯定感が高まった生徒も多かったのだろう。加えて、事前に評価項目を示したことが、生徒の目的意識を向上させるのに功を奏したことも考えられる。否定的理由については、「英語自体が分からない」など、英語に対して苦手意識を持つ生徒の意見が目立った。

投野教授は、インタビューテストの自己評価表についても具体性がないことを指摘された。具体的な語彙と文法を用いた技能のCAN-DOをチェックすべきであり、それらが実際に使えるかどうかという視点に基づいたタスクをベースとしたアセスメントが抜けている、ということである。例えば、「〇〇のような場面で△△の表現を用いて～ができる」、というような具体的なレベル設定をすることが望ましい。さもないと、授業後の自己評価と同様に、新鮮味が失われ形骸化していく可能性があるからである。行動ベースのCAN-DOにとらわれるあまり、文法表現や語彙を切り離して考えると、単元レベルの目標としては評価基準の具体性が欠け、その結果、生徒が達成度を実感することが難しくなることが分かった。今回はまだ初めての取り組みだったので、効果的だと考える生徒が多かったのかもしれないが、今後パフォーマンステストへの意欲や自己肯定感を高めていくためにも、評価基準をより具体化した評価表のあり方を追求したい。

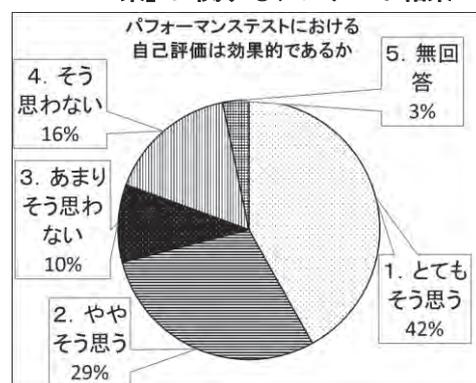
(5) 指導教員の感想からの分析と考察

最後に、対象クラスの教科担当の先生にインタビューをすることで得た情報を参考に記す。

まず、教師の使う英語が増えたことが挙げられた。4月当初は、文法指導や本文の訳読を主眼に置いた日本語での解説が中心の授業だったが、CAN-DO目標を意識し、自分自身の授業を見直していった。その結果、英語でのオーラルイントロダクションを授業に取り入れたり、生徒に英語で発言させる機会を増やそうとしたり、徐々に英語の使用量が増えていった。

また、生徒の興味を引き付ける工夫をするようになった。生徒の自己評価から、英語学習に対して消極的な生徒が多いことが分かり、何とか少しでも興味を持ってくれたら、という思いで教材研究に費やす時間が

資料 19 「インタビューテストの自己評価の効果」に関するアンケート結果



増えた。実際に、ICT を駆使して、教材に関するビデオを授業の導入に使うなどの工夫を取り入れた。英語好きの生徒が増えたのは、このような指導改善の結果であると考えられる。

さらに、生徒が話しやすい雰囲気を授業中に作るように心がけた。4月当初には意欲の低い生徒が多く見られ、生徒が英語で話す場面になると静まりかえる雰囲気をどうにかしたいという思いがあった。「失敗は恥ではない」と常に生徒に伝え、発話する機会を増やすことを心がけた。生徒たちは、授業後に自己評価をすることで、「その日ごとに、分からなかったところが自分で分かるので、質問してみたい」という意欲を持つようになり、自ら英語の質問をしてくることが多くなったことや、授業中の英語での発話が増え、声も大きくなってきたことが、CAN-DO リスト活用の効果として実感できたそうである。

## IV 研究のまとめ

昨年度より取り組んできた CAN-DO リストの研究は、各学校が参照できる小中高一貫した英語能力指標「県 CAN-DO リスト」の完成と、その「県 CAN-DO リスト」を各学校が目標と指導と評価に具体的に活かしていく活用法のモデル作成に至ることができた。実践を試みて、CAN-DO リストをベースとして指導者の指導法や評価法の改善が見られ、その結果、質問に来る生徒が増えたり、パフォーマンステストにおいて「何を頑張ればよいか分かってやる気がでた」と学習意欲の向上がみられたりするなど、生徒にとっても一定の成果をみることもできた。

英語の学習は生涯続けていくものであり、指導者は、自ら向上心を持って学んでいくことができる自立した学習者を育てていかなくてはならない。CAN-DO リストを英語学習に活かしていくことは、児童・生徒の英語を使ったコミュニケーションスキルを育成するだけではなく、具体的な目標を持ち、自己の能力を把握し、常に省察し、自ら取り組んでいく力なども育成することにつながるということが改めて分かった。CAN-DO リストは英語指導者にとって、また英語学習者にとって、とても有効なものであると言える。

また、投野教授との CAN-DO リスト研究会からも多くを学ぶことができた。各学校が大枠となる「県 CAN-DO リスト」を参照して、学習到達目標 CAN-DO リストを作成する方法は、とても先進的で有効な取り組みであることを認めていただいた。しかし、学年到達目標 CAN-DO リストに基づく日々の授業の CAN-DO 目標として、より具体化したものがさらに必要であることを教えていただいた。日々の CAN-DO 目標として自己評価の評価基準には、その日の言語活動に結びつけて、語彙・表現の具体的記述とセットにした行動目標にしていくことが望ましい。このことを踏まえ、今後、より効果的な授業の自己評価表の開発や、パフォーマンステスト評価法について検討していく。小学校や高等学校における CAN-DO リストの観点からの到達目標の設定についても、研究を進めモデルを示していく。

「英語が使える福井人」を育成できる福井県の英語指導改善のために、今後も CAN-DO リストの活用を学校現場に広げていけるような活動を続けていきたいと考える。

本研究の実施にあたり、東京外国語大学教授投野由紀夫先生をはじめ、研究協力校としてご尽力くださった先生方に、この場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

### 《参考文献》

- 文部科学省初等中等教育局(2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 平成 26 年度使用教科書『New Horizon English Course 2』東京書籍
- 大下邦幸(2014)『意見・考え重視の視点からの英語授業改革』東京書籍
- 投野由紀夫(2013)『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館書店